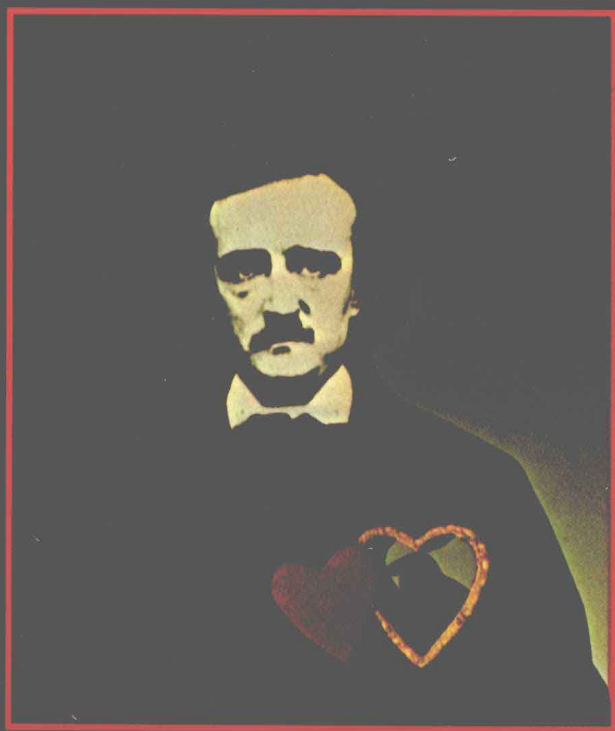


# 告げ口心臓

E・A・ポオの生涯と作品

ジュリアン・シモンズ 八木敏雄訳



THE TELL-TALE HEART



# 告げ口心臓

—— E・A・ポオの生涯と作品

ジュリアン・シモンズ

八 木 敏 雄 訳

東京創元社

# THE TELL-TALE HEART

The Life and Works of Edgar Allan Poe

検印廃止

by

Julian Symons

Copyright 1978 in England

by Julian Symons

This book is published in Japan

by TOKYO SOGENSHA Co., Ltd.

by arrangement with Julian Symons

through Curtis Brown Ltd., London

and Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

告げ口心臓——E・A・ポオの生涯と作品

翻訳権所有

KEY LIBRARY

1981年12月25日 初版

著 者 ジュリアン・シモンズ

訳 者 や 八 木 とし 敏 雄

発行者 秋 山 孝 男

発行所 株式会社 東京創元社

(162) 東京都新宿区新小川町1-16

電 話 03・268・8231 (代)

振替 東京 6 - 1 5 6 5

1981, 12, Printed in Japan©

旭印刷・鈴木製本

乱丁・落丁本はお取り替えいたします

## 序

本書は従来、ポオ伝記に対する飽き足りない思いから生まれた。ポオの伝記といえば、たいていはその生活と作品をないまぜにし、ある年にポオがなしたことの記述に、彼の詩や小説についての長々しい分析や批評が混入してくる。この手法が多く、文学評伝の場合には妥当であるにしても、ポオの場合には断じて不適切である。この方法によると、ポオが不断に金銭上の困難に見舞われていたこと、その自尊心と飲酒癖、詩作を理想としながらも評論や小説を書くことに労力の大半を奪われていたこと、死に先立つ十年間にわたって彼が抱きつづけた生きる目標が自分自身の雑誌を編集発刊することにあつたことなどの実生活上の悲惨な現実が隠蔽かくぺいされたり、ぼやかされたりするきらいがある。ところが、それこそがポオの生活であり、そうすることこそが彼の人生の目標だつたのだ。小説は、後世の価値がどうあれ、生前のポオにとっては何よりもまず金銭を得るための手段であつたにすぎない。版をあらためるごとにポオはそれらの作品に手を入れていたけれども、詩作や雑誌を発刊する仕事のほうをポオははるかに重視していたのだ。

ポオが実際に生きたがままの生涯を呈示するために、私はポオの生活と作品とをできるかぎり分離した。両者を完全に分離するのは不可能だし、また望ましいことでもあるまいが、本書の伝記の部で

作品に言及するのを必要最小限度にとどめた。『ナンタケット島出身のアーサー・ゴードン・ピムの物語』の出版事情や評判については伝記の部で、作品の性格や品質については評論の部で述べるのが妥当であろう——すくなくとも私にはそう思われる。

この本がポオの新しい見方を提供することになれば幸いだが、これは独創的な学問的研究書ではない。もっとも、一般読者を対象にするポオの本が学問的であることなど、今日ではほとんどありえないことだろう。ポオの伝記的研究は、その生国アメリカにおいて、おそるべき徹底性をもって続行されてきた。このうえさらに重要な伝記的事項が付加されることがあるとは考えがたい——たとえ未知の手紙が一束みつかったところで、すでにわれわれが彼の生涯や人柄について承知していることに細目以上を付け加えることにはなるまい。なるほど最近の批評的研究はポオの作品の新しい見方を提供している。が、その価値については、のちほど見るように、私は懐疑的である。執筆中にポオ学者たちとの討論を避けたのも、私の解釈が彼らの意見と大幅に異なり、実りなきままに折り合いをつける羽目になりかねないと予測したからである。だがアムハースト大学のロバート・フロスト図書館の皆さまには厚くお礼を申し上げたい。この本のおおかたはこの図書館で書かせていただいた。館員の方々は、私の際限ない、ときには無知ゆえの質問にも、こころよく応じてくださり、入手困難な本やパンフレットや雑誌などを私のために忍耐強く捜してくださった。

ジュリアン・シモンズ

目次

第一部 生涯

|    |                 |     |
|----|-----------------|-----|
| 1  | 孤児              | 八   |
| 2  | エドガー・アランから――    | 一七  |
| 3  | エドガー・ポオへ        | 二二  |
| 4  | ヴァージニア大学から      | 二九  |
| 5  | ウエストポイントを去るまで   | 四〇  |
| 6  | ジャーナリズムと結婚      | 六〇  |
| 7  | 野心的編集者          | 六六  |
| 8  | ニューヨークとフィラデルフィア | 七六  |
| 9  | 《ペン》誌           | 八六  |
| 10 | 《スタイラス》誌        | 一〇九 |
| 11 | ニューヨークふたたび      | 一二九 |
| 12 | 名声のごときもの        | 一三三 |
| 13 | フォーダム、そして破局     | 一五〇 |
| 14 | ヴァージニアの死        | 一五五 |

|    |              |     |
|----|--------------|-----|
| 15 | 人生からの逃避      | 二七三 |
| 16 | 絶望する心        | 二八三 |
| 17 | 南部紳士故郷に帰る    | 二九  |
|    | エピローグ——死後の評判 | 三九  |

## 第Ⅰ部 作品

|   |                   |     |
|---|-------------------|-----|
| 1 | 批評                | 二四三 |
|   | 幻想的ポオと論理的ポオ       | 242 |
|   | 見得を切る             | 251 |
|   | ポオとアメリカの文学        | 254 |
|   | 批評の見本             | 257 |
|   | ポオの批評家としての資質      | 263 |
| 2 | 詩                 | 二六八 |
|   | 初期の詩              | 268 |
|   | 獨創性——その危険性と報い     | 276 |
|   | 『ユリイカ』            | 281 |
| 3 | 小説                | 二八六 |
|   | 出発——『フォリオ・クラブ物語』  | 286 |
|   | ユーマア小説            | 292 |
|   | 恐怖小説              | 310 |
|   | 現実と超現実の物語         | 303 |
|   | 推理小説              | 310 |
| 4 | 精神分析学的アプローチ       | 三三六 |
| 5 | エドガー・ポオ——貴重な学問的財産 | 三三三 |
| 結 | び——エドガー・アラン・ポオの問題 | 三三三 |
|   | 訳者あとがき            | 三三六 |

## 主要文献

## 人名索引

# 告げ口心臓

— E・A・ボオの生涯と作品



ビルとマリエッタ・フリチャードへ

本文中の\*印は原注と記さないものは訳者注

第I部  
生涯

# 1 孤 児

女優はそれを最後に楽屋に姿を消したが、劇場内にはいたるところで賞賛の言葉がささやかれていた。「なんて魅力的な女性だ！ ああ、あのあで姿！ なんと潑刺として豊かな表情だろうか！ それに演技もすばらしい！ ああ、あの声！ あれほど甘美な声がこの世にまたとあろうか！」

——エリザベス・ポオにかかわる南部のある新聞の記事から

一八四一年、エドガー・アラン・ポオは自分の略歴を覚書ふうにしたため、後年、遺作の管理を委嘱することになる、ルーファス・ウィルモット・グリズワルドなる男に送っている。それによれば、ポオは一八一一年一月、「ボルチモアで一、二を争う、古く由緒ある家系に」生まれた。両親は二人とも彼が二歳のときに結核で死んだが、「ヴァージニア州はリッチモンドの、きわめて裕福な紳士ジョン・アラン氏が私を氣に入り、祖父のポオ將軍をくどいて養子にする承諾をえた」。そこでポオはアラン氏の家庭で育てられることになり、「またアラン氏には子供がいなかったので——常日頃から氏の実子で相続人とみなされていた」。それから「一八二五年にヴァージニア州シャーロットヴィル在のジェファソン大学に入学、そこで放蕩三昧の三年間を過ごした——当時の大学はなんとみだらない場所だった」。かくして大学から故郷にもどったとき、ポオはかなりの借金をかかえていた。「アラン氏が賭博の借金の一部の返済を拒んだので、私は無一文のまま家をとび出し、当時独立戦争をた

たかっていたギリシア軍に加わらんものと、ドン・キホーテさながらの遠征の途についた」のである。覚書によれば、ポオはギリシアにまでは行けなかったが、どうやらペテルスブルグにまではたどり着き、そこで窮地に陥っていたところを当地のアメリカ領事に救われた。一八二九年無事に帰国したが、アラン夫人がすでにこの世を去ったのを知り、「ただちにウエストポイント陸軍士官学校に士官候補生として入学した」。およそ一年半後にアラン氏は再婚、「氏は当時六十五歳だった」。ポオは新しい養母と喧嘩し、アラン氏の不興をかった。「その後間もなくアラン氏は死んだが、夫人とのあいだには息子が一人できていたので、莫大な遺産を残しながらも、私の分はびた一文なかった。軍隊は貧乏人のいるところではない——私はさっそくウエストポイントを去り、食べるために文学界に身を投じた」。ボルチモアのさる新聞が詩と小説の各一篇に賞金をつけて募集していたので、それに応じたところ、「選考委員会はその賞を二つとも私に与えた」。そして「その後間もなく『サザン・リタリ・メッセンジャー』誌の所有者トマス・W・ホワイト氏に招かれて同誌の編集に携<sup>たずさ</sup>わることになった……。最近は英国の二つの雑誌に記事を連載しているが、その雑誌の名を明かすことは許されていない」のであった。

ここでポオが語っていることはたいい不正確で、なかにはまったく事実無根のものもある。彼は自分の年を実際より二歳若くいつわっている（だからヴァージニア大学に入学したのを十四歳のときになっている）。たしかにポオ家はボルチモアの出ではあるが、同市で一、二を争うほどの古い家柄などではなかった。ポオの父方の祖父デイヴィッド・ポオはアイルランドで生まれている。この人は糸車作りの職人だったが、アメリカ独立戦争に参加し、一七七九年にはボルチモア市主計総監補佐に任じられ、俗にポオ《將軍》の名で知られていたとはいえ、階級は少佐にすぎなかった。ジョン・アランはさほど裕福な紳士ではなく、暮らしに困らぬ程度の商人にすぎず、デイヴィッド・ポオはくどかれる

までもなく、よろこんでエドガーを養子に出した。アランはポオを正式に養子縁組することはなかったし、彼を息子とも相続人ともみなしたことはなく、ポオを大学にやっただけといえ、たった一年で退学させた。ギリシア遠征とペテルスブルグ行きはまったくの作り話であり、アランは再婚したとき五十歳にしかなくなっていなかった。彼が再婚してもうけた息子は一人ではなく三人であり、ポオは突如としてウエストポイントを去ったとしているが、そのまえにこの士官候補生はみずから仕組んで軍法会議にかかっている。ポオは《サザン・リテラリー・メッセンジャー》誌の編集に携わったとしているけれども、編集権を完全にゆだねられている者という意味での編集者ではなく、彼が執筆したと主張する二つの英国の雑誌の名を明らかにした研究報告はいまだかつてない。

生まれた年をいつわったり、家系を実際よりも絢爛豪華に脚色したり、過去の経歴を改竄したりした作家はほかにもいるが、ポオの場合に特徴的なことは、彼の生涯がその小説に劣らずロマンチックなことである。だがポオの人生に欠けていたのは、その虚栄心と演劇的感覚がひとしく要求するはずの貴族的威厳と劇的要素であった。ポオの両親はともに役者であり、その生涯は、彼がなかば意識的に悲劇の主人公にしたてあげた芝居として見るとき、いちばんよく理解できる。彼の一生には奇妙に循環する型があり、そこではボストン、リッチモンド、ボルチモアという場所が重要性をおび、どうしても象徴的な意義を付与したくなる。ポオが生まれたのはボストンで、その地は彼がもつとも悲惨な姿で世にデビューする舞台ともなった。リッチモンドで過ごした幼年期と少年期はポオの生涯でいちばん希望に満ちた時期だったが、死の数か月まえ、彼が必死に幸福を求めて舞いもどったのもリッチモンドだった。彼が誇りにした父方の血筋が由来する土地ボルチモアは、また彼の死地でもあった。まだ他にもいろいろなことが連想される。死の床に横たわるポオの母親のために義捐金が公募されたことがあり、ポオ自身が経済的に逼迫したときにも義捐金が募られたことが一度ある。ポオの父

親が書いたとされる現存する唯一の手紙は、内容といい調子といい、ポオの手紙のあるものと妙によく似ている。ポオは両親が舞台で演じたようなメロドラマを歪曲し、おぞましくし、それを人生という舞台で演じてみせたのである。

エドガー・アラン・ポオは一八〇九年一月、おそらくはその月の十九日、ボストンで生まれた。父親のデイヴィッドは前述のポオ《將軍》の四男で、四代前の先祖はアイルランドの小作人だった。母方の先祖についてはほとんど知られていない。エリザベス・アーノルドなる女優が一七九六年にイギリスから渡米し、同名の九歳になる娘を同道したが、これがのちのエリザベス・ポオである。女優エリザベス・アーノルドは渡米直後か、イギリスを発つ直前に、タブズなる男と結婚しているのので、どうやらアーノルド氏は女優の渡米以前に死んでいたらしい。一七九六年四月、タブズ夫人は娘に初舞台を踏ませた。歌手としてだった。出し物は『城の神秘』というゴシック風メロドラマで、場所はボストン劇場であった。

エリザベス・ポオ、あるいは芸名で呼ぶならエリザベス・アーノルドは、二十四歳の若さで死んだ。しかしその短い生涯のあいだに二度結婚し、三人の子供を生み、女優としてはかなりの名声を博した。初舞台を踏んでから二、三年後には、母親の名は劇場の記録から消えている。タブズと別れて舞台を棄てたとも考えられるが、おそらく死んだのだろう。それから一年以内にタブズも舞台から姿を消し、十二、三歳の少女エリザベス・アーノルドは天涯の孤児となったが、俳優仲間の善意や彼女自身の評判も上々だったこともあって、それほど悲惨な境遇に転落することはなかった。彼女は舞台で歌い、『ヘンリー四世』第一部のジョン王子の役を演じ、バレエを踊った。十四歳になると、脇役や、呼び物のあとに演じられる寸劇『甘えん坊』のリトル・ピククルのような子役を卒業し、フィラデルフィアで演じたオフィーリアのような主役を演じるようになった。彼女が潑刺たる女優で、魅惑的な個性

の持ち主だったことは確かである。彼女は小柄で、ばら色の肌をした丸顔、短く黒い巻髪、美しい眼をしており、立居振舞いはきびきびとして粹だった。一八〇二年、彼女はチャールズ・ホプキンズという若い役者と結婚し、一八〇五年十二月の暮れにホプキンズが一座の他の二人とともに死ぬまで、この夫婦は多くの芝居で共演した。夫の死から数か月もしないうちに彼女は一座の俳優だったデヴィッド・ポオと再婚しているが、彼はホプキンズ扮するところのピーター・ティーズル卿の相手役ジョーゼフ・サーフィスを演じたこともあった。ただし、これは死んだホプキンズに対して彼女が不実だったことを意味しない。アメリカにかぎらず、イギリスにおいてもそうだったが、当時の演劇界では女優が男性の保護下にあることが周知であることが重要だったのである。

デヴィッド・ポオは、その息子の生涯の背景をなす人物の誰にも劣らず影の薄い存在だった。彼はがっしりした体格をした美貌の若者だったが、役者としては明らかに妻の比ではなかった。ポオ『將軍』は役者になるというような向うみずで不名誉なことをしかした息子と縁を切っていたようだった。彼が大酒飲みだったことを示す証拠もあり（たとえば、酔っ払っていることの婉曲表現「気分すぐれず」を理由に、彼はある芝居から忽然と姿を消した）、また現存する彼唯一の手紙には、その息子がときおり示すことになる一種の嘲笑的なけんか腰の口吻が認められる。いとこに宛てたその手紙には、こうある。

君は僕に誓って約束したのだ、二十三日にマンション・ハウスで会うことを——そこで僕は名譽にかけて誓う。もし三十ドル、二十ドル、十五ドル、たとえ十ドルでも貸してくれるなら、ポルチモアに着き次第、ただちにそれを君に返すことを……。使いの者が持つてくる返事を見れば、はつきりするだろう、君がまだ僕に「好意を抱いている」か、それとも、僕がまだ向うみずの若

者だった頃に、僕が当時も今も立派だと信じているこの職業を選んだことで、金持（そう理解している）の親戚から輕蔑される定めかどうか。しかし、もし一族のお望みとあらば、この職業も即刻やめて進ぜよう——ただし、この僕が食べていける別の仕事があるならのことだが。

ポオ夫妻はボストン座の有力メンバーで、エリザベスが出産の床に就いたとき以外は常時出演していたが、収入がよいとはとても言えなかった。一八〇八年のある寄付興業は「大損害」に終わった。次の寄付興業のさいには、ある雑誌が論説で協力を呼びかけ、ポオ夫人は「一シーズン中に、この国の劇壇では前例のないほどの数多くのむずかしい役柄をこなしてきた」と述べ、一晚に三役を演じなければならぬようなときでさえ、彼女は台詞をまちがえなかった、と伝えた。

ポオ夫妻の最初の子供ウィリアム・ヘンリーは一八〇七年一月に生まれ、その二年後にエドガー・アランが生まれた。そしてこの夫妻の最後の子供ロザリーは一八一〇年に生まれた。そのまえに一家はニューヨークへ移ったが、これは不運な選択だった。ニューヨークではデイヴィッド・ポオの演技は酷評され、一八〇九年十月十八日に上演された『嘆くなんて馬鹿よ』なる芝居を最後に彼は舞台から姿を消した。これ以降の彼についての消息はすべて推測の域を出ない。彼の妻が一八一〇年七月にニューヨークから南部の公演旅行に出たとき、彼が同伴したかどうかもわかっていない。いっしょだったとしても、すぐ別れたことになる。一説によれば、彼は一八一〇年十月に死んだことになっているが、死亡の記録はまだ発見されていないし、生きていたとしても、どうやって生計を立てていたのかは皆目わからないが、役者を廃業したことは確からしい。父親が蒸発したというようにことさえ、エドガー・アラン・ポオの生涯にはふさわしいのである。

エリザベス・ポオは自分の女優としての地位と、おぼつかない健康の両方を保つために奮闘しなけ



ればならなかった。彼女はリッチモンドからチャールストンへ、チャールストンからノーフォークへ、そしてふたたびリッチモンドへと旅した。ポオ《將軍》が長男ウィリアムを引き取ったが、景気は全般に悪く、ロザリー出産後のエリザベスは絶望的な状況にあつたにちがいない。一八一一年八月には、彼女はまだリッチモンドで軽い喜劇やメロドラマに出演しているが、十月十一日以降になると、とても舞台に立てるような健康状態ではなくなつた。あるリッチモンドの住人の十一月二日付の手紙は、女優が窮状にあることを述べ、「いま上流階級がいちばん足しげく通つてゐるのは——彼女の部屋で、そこでは「衰弱した彼女をもたせようとして料理や看護に腕をきそつてゐる」と書いてゐる。同月の二十九日には彼女に義捐金が届けられ、ある新聞の告知欄には「慈悲深い人たちに」と題し、「ポオ夫人は病床に臥し、子供たちをかかえて、救いを求めている。おそらくこれが最後の援助のお願いになるだろう」と訴えている。反響のほどは不明だが、最後の文句は正確だつた。一八一一年十二月八日、エリザベス・ポオは死んだ。

以上がエドガー・アラン・ポオの両親の生涯と人柄について正確にわかつてゐることのすべてである。資料詮索にかけてはおそらく世界でいちばん徹底してゐるアメリカの文学研究者にしても、逸話や回想から、これ以上のことはなにも発見できなかったとは意外に思われよう。ところが当時アメリカで演劇に携わつてゐた人たちの生活は不安定で、ぎすぎすしており、気まぐれなものだつたのだ。演劇の中心地はニューヨーク、フィラデルフィア、ボストン、チャールストンの四か所しかなく、それに次ぐのはボルチモア、ワシントン、リッチモンド、サヴァナだつた。俳優の寿命は一般に短く、経済的にはほとんどいつも不安定だつた。東部では、フィラデルフィアのクエーカー教徒やボストンの清教徒グループによつて、あらゆる種類の演劇活動がひどい妨害を受けた。ボストンで最初に建てられた劇場は巧妙にも「ニュー・エクスピション・ルーム（新展覽会場）」と名づけられたが、その